

「九十年の重み」

名取市立みどり台中学校 3年 鈴木 舜

校外学習で稲作体験をする機会があった。

「皆さんは朝にお米を食べますか？」

作業が一段落ついたところで農家の方に尋ねられ、僕は気まずくなって視線を横に向けた。朝食はおろか、夕食でさえ、ごはんを食べることがめっきり減ってしまった。

小学校低学年までは、ごく当たり前のように、一日3回ごはんを食べていた記憶がある。ちょうど中学に入ったあたりから、パンや麺が増えていった。母親が勝手に変えたのではない。何が食べたいか聞かれる度に、僕がパスタやピザを頼んでいたからだ。なかなか体が大きくならずに悩んでいた時期でもあり、母なりに考えて、自分が食べやすい物を作ってくれていたのだと思う。

父親の実家は山に囲まれた盆地にある。日本の食糧自給率が40%を切る中、この地域の自給率は200%近くあり、カナダやフランスの数値とほぼ等しい。見渡す風景も僕達が住む街並みとまるで違う。平坦部には、大型機械で効率よく作業できるよう、区画整備された巨大な田んぼが敷き詰められている。山の斜面には、ぶどうの果樹園が広がり、山道沿いには、日本では珍しいタバコの葉まで生産されている。

僕の曾祖母は大正生まれの93歳。今年のお盆も、年齢を全く感じさせない元気な姿で、帰省する僕らを迎えてくれた。

「ほお、おっきくなったなあ」

「畑で作ったスイカあるよ」

美味しそうな食べ物に溢れている土地柄だけあって、当然この話題になった。

「ごはん、ちゃんと食べてるかい？」

最近、お米を食べる習慣が少なくなったことを母親が伝えたと、曾祖母が太平洋戦争の話をし始めた。記憶がしっかりしていることに、改めて驚かされる。

戦時中、この地域一帯は、国力を支える食料生産地として厳重に管理され、農家の人たちでさえ白米を食べる事はほとんどなかったらしい。アワや麦などの雑穀と、道端に自生する雑草の天ぷらをご馳走だったという。

戦争を知らない僕からすれば、どこか大げさで、にわかには信じられないような話だが、白いご飯は国のために戦っている兵隊さんの食べ物で、収穫したらすぐさま戦地に送られたことを聞くと、今も世界のどこかで同じことが起こってい

るのだろうか、と想像せずにはいられなかった。曾祖母は、大正、昭和、平成と、荷馬車や戦争の時代から贅沢で平和な時代に激変していく光景を、その目に焼き付けながら、90年以上も生きてきたのだ。言葉の隅々に重い説得力がある。

翌日、皆で曾祖父のお墓参りに出かけた。墓地の入り口に大きな碑石が立っていた。

「これはねえ、特攻隊の人たちのお墓だよ。ごはん、炊いてきたから」

曾祖母の言葉に続き、父はふっくら炊き上がった白米を取り出すと、慣れた手つきでお供えして両手を合わせた。自然と僕もそれに習った。戦争末期、白米は更に貴重なものとなり、特攻隊員が出撃前におにぎりとして食べていたのだと、帰り道に教えてもらった。

もちろん、今と比べるには隔たりが大きすぎる、何十年も昔の話である。近代化や国際化が進み、様々な食文化に触れることができるようになったことも、決して悪いことではないと思う。だが、身近な人から話を聞き、お米を食べる、という意味を考え直す大事な機会を得たことは、思いがけない収穫だった。

今にして思えば、父も母も、同じように教わり、育ってきたのだろうか。日本の歴史や、時には人の心までも支えていたお米の力に感謝しながら、当たり前のように出てくる食事の価値やごはんの意義を、もっと大切にしたいと思う。少しずつかもしれないが、お米を食べる習慣を取り戻していきたい。